沖島つながりマップ

～過去の成果から未来の展望へ～

沖島の持つ「つながりの豊かさ」とは？

沖島でのインタビューは、令和5年度 文化庁 Innovate MUSEUM事業「ケアしあうミュージアム」の一環で実施されました。これはボーダレス・アートミュージアムNO-MAの周辺地域を対象に、インタビュー活動を通じて「つながり」の価値を再考するプロジェクトです。前年は近江八幡市の伝統的な「地蔵盆」に焦点を当てました。第２弾となる今回の沖島インタビューでは、そのユニークな地理的特徴と超高齢化が進む社会的課題を通して、島の魅力と多様なつながりを探りました。本紙とは別冊で６つのインタビューをそれぞれにまとめた6巻からなるインタビュー集を制作しています。ぜひ参照してご覧ください。

起点

世代間の絆と島の幸福感

 # 島の幸せな暮らしの維持

みんなが幸せになるものを残したいし、
残す方法を考えたい。 第六巻11頁

 # 島の若者の愛着と交流

嫁さんもらって子どもができたら、
いまさら島には帰られへん。 第四巻3頁

祭りや行事になると、いろんなところから
帰ってきはる。 第一巻10頁

祭りで帰ってくる子どものために
70～80人分のお菓子用意したな。 第五巻3頁

他出子がくっつきやすいのは「連れ」という
存在が大きい。要は友だち関係。 第六巻8頁

琵琶湖と人とが共生する魅力

 # 多様性が島の魅力を形成

沖島のこと気に掛けてる人って、めちゃくちゃ
多い。不思議な魅力がある。 第三巻8頁

 # 地域風習の重要な継承

１年に１回のカマド払いは、人間が生活を
していく上で、基本的なこと。 第一巻4頁

今でも、サト豆とかきもちは
作ってはりますわ。 第一巻4頁

獅子舞を見に行くと小さい飴玉がもらえて、
あれはうれしかった。 第一巻4頁

子ども用の小さい神輿があるんよ。
祭りはにぎやかやったな。 第五巻3頁

 # 自然と「人」が沖島の魅力

みんなが助け合う慣習に
なっとったで。せざるを得んし、
して当然。 第一巻6頁

昔からの習わしとか
自然とのつながりとか、
ひっくるめてすべてが
沖島の魅力。 第三巻8頁

人だけじゃない。琵琶湖もあるし、
自然も豊か。イベントもたくさんある。
第三巻8頁

沖島にはすごい引力がある。
スピリチュアルというか、
自然治癒の力も魅力。 第六巻10頁

活動

女性たちの協力で地域振興

 # 女性による離島振興の成功

当時、沖島は男社会で、
漁師一本できはった人が
多かったから難しかった。
第二巻2頁

苦肉の策として
「女性を入れよう」と
提案された。 第二巻2頁

「女の人で動かなあかん」
となった。頼りになるのは、
おばちゃんたち。 第二巻2頁

ホテルニューオウミの
料理長さんに講師を
やってもらった。 第二巻3頁

 # アイランダーが協力者を結ぶ

アイランダーをきっかけに、
ほかの離島ともつながった。
第二巻6頁

アイランダーは離島の祭典。
全国から200を超える島の
人たちが集まる。
第二巻6頁

沖島民泊湖心kokoの管理人
になった橋本花菜子さんは、
アイランダーで誘った。
第二巻6頁

「滋賀県で離島!?どこ？」
って言われる。 第二巻7頁

漁業の兼業推進

 # 島外で働きながら漁業に従事

準組合員として
島に帰ってきて、
漁師を始める人もいる。
第二巻8頁

第◎巻×頁
インタビュー集の
該当ページを
示しています。
インタビュー集も
あわせてお楽しみ
ください！

移住者の共生と学び

 # 移住後の深い島理解

「民泊の管理人をしながら、自立を目指す仕事」
というミッションが魅力だった。 第三巻4頁

 # 移住者の新生活と地域活性化

たどり着いたのが、離島ハウスを民泊にして
活用するというアイデア。 第三巻1頁

地域で働くことに憧れがあって、
地域おこし協力隊に応募して
滋賀県に戻ってきた。 第三巻2頁

 # 移住者が漁師の知識を学習

漁師さんに魚の調理方法を教えてもらったり、
漁船に乗せてもらったり。 第三巻3頁

観光まちづくりの新たな試み

 # 観光客増加による生活変化

漁師の仕事と生活だけじゃない何かが
存在しつつあるように思う。 第二巻10頁

 # 民泊を通じた地域受け入れ

大学生が島に来るとにぎやかになる。
１つの家に2～３人泊めてましたわ。
今も年賀状やらくれはる。 第一巻3頁

20代の若い子から、短期で漁師見習い
したいって話があった。 第四巻7頁

 # 地域活動が若者の手伝いから

「祭りをやる時に人がいないから手伝って」
と誘われて、学生を募った。 第六巻3頁

成果

郷土料理で地域内交流の促進

 # 地域協力による郷土料理学習

自治会長と協議会長は兼任だけど、
私たちに任されてるところも多い。
第二巻4頁

いち主婦がよくここまで支えながら
やってきたなと思う。 第二巻11頁

 # 離島交流が地域課題解決に貢献

どこも似たり寄ったりの
課題を抱えている。 第二巻6頁

インタビューで集めた
沖島に関わる人たちの
言葉を「起点」「活動」
「成果」「変化」に分類・
整理しました。その上で
未来の沖島について
考察しています。

漁業の変化と若い世代の挑戦

 # 湖魚の販売方法を若者が模索

もっと早く通船ができていたら、
若い人が島から出ていくことも
なかったやろうに。 第一巻2頁

沖島で暮らす親としては、子どもを
呼び戻したい気持ちもある。
第二巻9頁

もう、シジミはあんまり獲れへん。
琵琶湖の土質が悪いんちゃうか。
第四巻1頁

燃料代もむちゃくちゃ上がってる。
子どもに「漁師せい」とは言えへん。
第四巻5頁

若い人は、島の外に仕事を求めて
出て行ってしまった。 第四巻2頁

若い漁師が仲買にも卸しつつ、
複数の売り方を自分なりに考えている。
第四巻7頁

島での個人の成長と機会創出

 # 地域行事への深い理解

お盆ってどんな意味があるんだろうって
考えるきっかけになった。 第三巻9頁

秋には魚を供養をする法要がある。意味を
理解した上で、毎年参加している。 第三巻9頁

沖島には「ともやみ」って言葉がある。
島全体の空気が変わるんです。 第六巻9頁

 # 島暮らしが仕事の機会拡大に

会社にいた時よりも圧倒的によその人と
仕事をする機会が増えた。 第三巻8頁

「沖島に住んでいる川瀬明日望」でもらえた
仕事がめちゃくちゃ多い。 第三巻9頁

 # 自然との丁寧な生活の再評価

1つひとつの暮らしを大事にするように
なりました。 第三巻9頁

魚1匹の命でも、本当に大切に食べさせて
もらうようになった。 第三巻9頁

多様な訪問者との交流拡大

 # 沖島訪問者の多様化

最近は外国の人も多いし、
今と昔とでだいぶ変わった。
第一巻2頁

最近、手話で会話する
人の姿をよく見る。
第二巻10頁

 # 長期的な学生との交流

上田先生がよう連れて
きはった。勉強になるん
やったらいいと思う。
第一巻3頁

「なんや、この子」って
言われたらかなわんけど、
今のところそんなことは
ない。 第二巻8頁

久保瑞季さんが沖島に
住んだことで、学生さんに
対する壁がなくなった。
第二巻8頁

学生が課題を感じて
その場所に住むことは、
すごくいい影響を生む。
第六巻3頁

 # 大学生の触媒効果

瑞季ちゃんが
突破口になって、
いい流れになって
きている。 第二巻9頁

2年間住んでいた
からこそ、島の人たちも
自分の子どもに会わせて
くれた。 第六巻3頁

変化

島内の結束力強化

 # 協議会の島内活動強化

外向きの活動が多かったけど、
今は内向きが増えた。 第二巻11頁

彼女たち（協議会）も島の人と
コミュニケーションを取ることを
最初にやった。 第六巻4頁

漁業の新たなカタチ

 # 漁師と湖魚のPR

漁師と接している時間が面白かったので、
沖島漁協組合で働いている。 第三巻3頁

漁師の苦労とか実感できないまま
魚を売る自分に違和感があって漁師に。
第三巻2頁

島の文化の変容

 # 同志会が地域行事に参画

同志会中心で開催する夏祭りは
いきなりは荷が重いと感じたので、
協議会が間に入って整理。 第二巻9頁

LINEグループを作って「同志会」と
名前を付けた。 第六巻8頁

 # 若者との交流で島民の視野拡大

考えの違う若い人や新しいライフスタイルが入ってきて、
島の人の世界が広がった。 第二巻8頁

外の人との関わりで、柔軟になったと思う。 第二巻10頁

観光客には慣れはった。 第二巻10頁

これから

外部との多様な関わり合いを通じた沖島の振興とソーシャルキャピタルの向上

- 限界集落に近づきつつある沖島は、外部との連携が不可欠で、島外の支援者との積極的な関わりが地域振興のカギを握る
- 島への多様な訪問者の往来がソーシャルキャピタルを高め、島の魅力と共生の基盤を強化する
- 他出子が島でさらに活躍することは、学生や若者に新たな役割を提供し、島の将来像を描くことにつながる

※「ソーシャルキャピタル」については左下の注釈をご参照ください。

次の10年につながる離島振興活動

1. 空き家対策活動を通じて、修理や片付けの支援を提供して、移住者を受け入れられる住宅を整備する。
2. 地域のコミュニティイベントの運営を支える ボランティアや若者を育成し、行事を持続可能にする。
3. 若い世代に自治会運営を委託し、新しいアイデアや視点を尊重して自治の仕組みを改善する。
4. 移住者と地元住民の協力体制を強化し、高齢者の生活支援や地域安全対策を実施する。
5. 他出子の帰省時に交流の場を提供し、友人との絆を深め、島の魅力を共有する場を整備する。
6. 他出子の両親のサポートを強化し、地域社会への貢献と安心した生活を促進する。

未来に継承したい沖島の文化的景観

1. 親密なコミュニティと助け合いの精神を維持し、地域全体が一体となる共感性を育む。
2. 共同性、協力、共有文化を尊重し、個人と共同体の調和を未来にも受け継ぐ。
3. 思いやりと温かい人間関係を大切にし、地域の人間性と結び付けていく。
4. 地蔵盆など伝統行事を通じ、子どもの誕生を祝い、家族の連帯を新しい世代に伝える。

沖島の絆が紡ぐ、島の未来像

田口 真太郎
成安造形大学
未来社会デザイン共創機構
研究員（助教）

離島振興事業が紡いできた新しい資本

インタビューを通じて、①ソーシャルキャピタル※の豊かさと、②集落の持続可能性に関する課題が浮かび上がりました。この２つの観点からインタビュー内容を振り返り、沖島の地域振興活動を「起点」「活動」「成果」「変化」の４つのフェーズで分析し、インタビューから浮かび上がる沖島のつながりを読み解く分析図を「沖島つながりマップ」として整理しました。この分析は、外部との関係を通じた振興とソーシャルキャピタル向上を示し、現在の活動が「未来に継承したい島の文化的景観」に結び付いていることを強調しています。

沖島振興マップの概要とフィードバック

２０２４年２月４日の「ケアしあうミュージアムＷＥＢフォーラム」で、本事業に協力いただいた関係者に沖島つながりマップを共有し、フィードバックをいただきました。その結果、地域振興のためのつながりの価値を再確認し、その影響力を明らかにしました。特に、コミュニティ形成の活動は成果が見えにくいものの、沖島のソーシャルキャピタルを育て、多様な振興事業を支えています。

沖島は、少子高齢化と人口減少が進む厳しい状況にあります。しかし、この島は漁業の衰退などの困難に直面しつつも、20年前から外部との交通網を整備し、観光客や大学生といった若者との交流を積極的に受け入れることで、地域の変化と振興の基盤を築き上げてきました。これにより、離島振興対策実施地域として認定を受け、本格的な振興事業が開始されました。離島振興事業は、女性たちが中心となり、郷土料理を通じた地域活性化事業や、沖島の魅力発信事業を成功させました。これらの活動は、地域外への発信だけでなく、地域内課題の解決にも大きく貢献しています。

さらに、滋賀県立大学の学生や地域おこし協力隊の参加が、沖島の文化や生活に新しい風を吹き込み、他出子が地域活動に関わるきっかけとなり、地域コミュニティの活性化につながっています。これらの活動を通じて、沖島では多様な人々が集い、新たなソーシャルキャピタルが形成され、離島振興の新たな動きが生まれています。

今回のインタビューから得られた考察は、地域振興における「つながり」の重要性を再確認し、沖島のような集落が直面する課題にも、前向きな見通しを提案します。つながりを育てる活動は時間と労力を要するものですが、その価値は地域の未来を照らす光となります。

※ソーシャルキャピタル…社会関係資本。社会や地域において、他の人に対して抱く「信頼」や、持ちつ持たれつなどの言葉で表現される「互酬性の規範」、そして人々の間の絆である「ネットワーク」を指す言葉。市場では評価されにくい「集団としての協調性」を生み出す。